

と思ひおてある義徳を討つと互に請ふとふまゝに戦ひしかば伊賀より打たれに義徳の首を打落しける

右等の次第後此多めに書きたるに給ふれと山寺學頭が望みあり給ふも唯今中くかゝりかくし四方静かありさ早しかば義徳あり給ふに後日書記し給ふれと殊に佛向寺是迄北有相縁起ともに望望を承れしかば僧兵儀に及ふに北度北御厚恩北よりしに和尚を引給ひて進上可成を時節を見て則ち西僧大石田へ忍び行て佛向寺和尚に山寺學頭の所為と此段つづきに申上るれ和尚も學頭の西僧を痛り思ふ由申され扱も過分の次方式をこれ一夜に君を代ふ出さる万事並面に滿意を得たり宣ひし給

扱其先佛向寺長松院を召れ其方奥州に逃越し君の御所ある目も承り申松原より依て長松院奥州利府に参り君北御所ある事無見束も存はるるのひより申せし所武蔵守守りて長松院を請し頼久公ふかく申され頼久公長松院に討面有りて跡にや長松院跡に残し給ふに申され河野長松院より山田大膳土屋市正并友木之助は是非今一軍と心にかけをまゐり慈恩寺へ落